

生態系に基づく災害リスク軽減のためのマングローブ／ブルーカーボン生態系：ワールドからの事例。

ルペス・ボーミア

塩性湿地、海草、マングローブを含む沿岸湿地は、しばしばブルーカーボン生態系(BCE)と呼ばれています。これらの生態系は、様々なサービス（調整、供給、支援、文化）を維持する上で重要な役割を果たすだけでなく、沿岸・海浜景観の構造的・機能的完全性を維持する上でも重要です。地球規模の気候変動により、異常気象の深刻さと頻度は世界的に増加しており、これらの災害のコスト（人命、財産被害など）は年々増加している。気候変動の原因と影響を緩和するための活動が行われている一方で、自然にポジティブなアプローチを採用することで、これらの災害のリスクとコストを削減するための、持続可能で安価かつ効果的な代替策が認識されつつあります。生態系に基づく災害リスク軽減（Eco-DRR）は、生態系の規制機能を活用して災害の影響を防止、緩和、軽減することを目的とした持続可能な環境管理戦略を含みます。特にマングローブは、激しいサイクロン、高潮、津波、海岸線の浸食などから沿岸地域を守るための最も効果的で弾力性のある自然の障壁であるため、このような解決策として優れた事例を提供しています。

本発表では、インドをはじめとする各国の事例を紹介し、マングローブ林が沿岸のコミュニティや沿岸の景観を守る上で果たす積極的な役割を明らかにするとともに、こうした認識が将来の災害リスクを軽減するための沿岸地域の再生につながっていることを紹介します。また、マングローブ林の重要性を認識した結果、マングローブ林の保護を目的とした地域の規制や計画が導入された例も紹介します。

ルペス・ボーミア(Rupesh Bhomia)

国際林業研究センター（CIFOR/ICRAF） 研究員

気候変動・エネルギー・低炭素開発グループのブルーカーボン・気候変動専門家として研究に従事。気候変動に対する自然に基づく解決策を設計するための潜在的な選択肢として、淡水泥炭地と沿岸マングローブ生態系に焦点を当てている。この分野の研究において、フロリダ・エバーグレイズやペルー・アマゾンの淡水湿地、インド、ホンジュラス、リベリア、ガボン、ガーナ、マダガスカル、セネガル、インドネシアの沿岸マングローブなど、淡水と海洋の両方の生態系について 10 年を超える研究経験を有する。